

## 情報化時代における哲学館のレゾンデートル

### 資料展示と研究資料化

浅見 洋

哲学館という呼称をもつ博物館は、現在の日本では「石川県西田幾多郎記念哲学館」（以下、哲学館と略記）以外にはない。そこで働きの場を与えられている者として、絶えず「哲学の博物館とは何か」という存在理由 (raison d'être) に関する問いの前に立っている。

法律上、博物館は「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む、以下同じ）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行ない、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と規定されている<sup>①</sup>。とすれば、哲学館の法的機能は①哲学資料の収集・保管・展示、②哲学に関する社会教育・調査・研究事業の実施ということになる。従来博物館はモノ資料の収集、保管、展示に重点を置いてきたが、近年の情報化社

会の進展にともなって情報発信機能の充実が求められている。元国立民族学博物館・梅棹忠夫氏が博〈物〉館に代えて、博〈情〉館という呼称を提唱したのも、そうした博物館のレゾンデートルである機能の重心移動を反映したものである<sup>②</sup>。

本発表では哲学館が現在実施している「資料展示」と「収集史料の研究資料化」<sup>④</sup>を事例として、情報化時代への館の対応とそこに存在する比較思想的営為について紹介しつつ、哲学館のレゾンデートルに言及したい。

#### 一 資料が内包する思想研究の情報

##### ——常設展示から——

哲学館が現在保管しているモノ資料は、主に西田の①原稿、書簡、日記等の手書き資料、②蔵書、写真、墨跡、書斎、筆記用具等の関連資料である。常設展示資料の多くは実物ないしは

レプリカであり、館内でキャプション付けして配置されている。収蔵資料数は年々増加しており、アーカイブ化する構想もっている。

情報公開手法は基本的には資料の館内展示である。哲学的思索へと誘うべく設計された館に足を運び、学芸員によって展示された資料を観覧していただくことによって、西田哲学が単なる画像情報ではなく、ある時空を生きた西田という人間の思索であるというリアリティ Reality を帯びて伝達される。それは展示品がそれ固有の歴史、ドラマ、情報を秘めた史料性をもつからであり、展示が単なる羅列ではなく、意図的に企画されているからである。西田が個物を歴史的、社会的に限定された歴史的世界の表現点と捉えたように、館の所蔵品の一つ一つも史的背景をもったモノである。

現在、『善の研究』初版本とその出版契約書が並べて常設展示ケースの中に置かれている。<sup>5</sup>『善の研究』は一九一一年二月に弘道館から出版され、契約書はその前年十月十六日に弘道館主辻本卯蔵と著者との間で交わされたものである。<sup>6</sup>『契約書』は「今般 西田幾多郎 著 純粹経験と実在 ヲ著作者ト発行者双方ニ於テ契約ヲ締結スルコト左ノ如シ」として、八条の契約項目が記されている。また、純粹経験と実在 と取り消し線が引かれ、「善の研究」と訂正の書き込みがなされている。さらに、契約書の右上部枠外には「七字削り四字入ル」とあって、西田の確認印が押されている。つまり、『善の研究』の原題は

「純粹経験と実在」であり、この原題が契約交渉の途中で改題されたのである。

この展示資料から筆者に与えられたリサーチ・クエストョンは(1)原題が改題された経緯と理由は何か、(2)この改題によって生じた影響は何か、であった。<sup>6</sup>(1)については一九三九年五月二二日の柳田謙十郎宛書簡に「私の『善の研究』というのは当時本屋の求もあり他人のつけたもの」<sup>(1975)</sup>と西田自身が記したように、改題は本屋(弘道館)のよう求めがあり、出版を託された紀平雅美が Josiah Royce (1855-1916) の *Studies of good and evil, A Series of Essays upon Problems of Philosophy and of Life, 1898* を参考に付けたものである。<sup>7</sup>

『善の研究』には出版後、間もなく異質な二つの批評が現れた。一つは高橋里美の批評論文<sup>8</sup>、今一つは倉田百三「生命の認識論的努力」である。<sup>9</sup>前者は主に「純粹経験」の概念を論じており、それは高橋が原題で構想されていた内容にそって『善の研究』を読んだことを意味する。比して、倉田は改題、ないしは西田の「此書を特に『善の研究』と名づけた訳は、哲学的研究が其前半を占め居るにも拘らず、人生の問題が中心であり、終結であると考えた故である」<sup>(16)</sup>という弁明ともとれる記述に基づいて読んだのである。つまり、『善の研究』の読み方には、原題が意図していた哲学的な読み方と改題が目的とした人生論的、通俗的な読み方が生じたということである。こうした二つの読み方を、加藤尚武は宗教的背景に由来するものと

して次のように暗示している。

倉田の支えになつてゐる透谷は自立をがむしやらに信じてゐる。「内部の生命は千古一様にして、神の外はこれ動かすこと能はざるなり」と語る透谷には自我の自律を支えるキリスト教的な神があつたからである。西田の宗教体験・禅は個我に「自己否定を通じて自律する自己」という逆説を課していた。

倉田を経て『善の研究』は「大正生命主義」の潮流の中で読まれていった<sup>10</sup>。しかし、加藤や野家啓一<sup>11</sup>が指摘するように初期において西田の生命理解と内部生命論は背中合わせである。そうした比較的思想的情報が常設展示資料の一本の取り消し線に秘められている。

## 二 情報化時代における人物博物館の将来

——企画展示から——

現在、館内で企画展示「未完の女性哲学者―西田幾多郎の姪、高橋ふみ」を開催している。この展示の起源は、筆者が四半世紀ほど前、哲学館の前身・西田記念館の保管庫にあつた風呂敷包みに目を止めたことにある。中には高橋ふみ（一九〇一―四五年）が留学先のドイツから叔父に宛てた手紙、講演原稿、渡航日記、そして手書き原稿「続フライブルク通信」が入っていた。手書き原稿は四百字詰め原稿用紙で百九枚、ふみが最後の引き上げ船で帰国し、郷里木津（現かほく市木津）で療養しな

がら、『東京女子大学同窓会月報』に書いたドイツ滞在報告であつた。没五十周年を期して『高橋文のフライブルク通信』<sup>12</sup>（七塚町、一九九五年）、次いで何冊かの書籍、資料集を刊行した。この企画展示は、ほぼ新刊『おふみに続け！女性哲学者のフロンティア 西田幾多郎の姪 高橋ふみの生涯と思想』（ポラーノ出版、二〇一七年）に基づいている。そのように企画展示という情報公開は、資料収集、調査研究の結晶と見なすことができる。

思索者たちのモノ資料は哲学館の展示＝情報発信の欠かせぬアイテムである。ただし、ICT時代における展示はコンピュータ・ディスプレイ上でレイアウトされた画像情報として、ウェブ上で不特定多数の人々が視聴可能である。これは保管資料の劣化を防ぐだけでなく、市民や研究者への情報提供量を飛躍的に増大し、社会教育、研究の便宜を図るという点で博物館機能の拡大に寄与する。しかし、情報化社会では総じて紙媒体の資料や情報は消えて行く傾向にある。現代の愛智者の多くはディスプレイ上で読み、書き、校正し、メールでコミュニケーションを取っている。だとすれば、思索の結晶である書籍や電子ブックは残るとしても、思索過程を辿ることができる思索ノート、手書き原稿、校正原稿、手紙に類するものはデータとして今後残存し得るであろうか。高橋ふみの資料に筆者が遭遇したのは没後約五十年後である。コンピュータで読み書きし、メールで通信する現代の愛智者の人生と思索の軌跡（史料）はデ

スク中に保存されているだろうか。情報化時代を生きる思索者、特に無名の愛智者の名を冠した人物博物館が新たに創設される日が来る可能性はほとんど無いように思われる。

### 三 収集史料の研究資料化について

現在、館では西田の直筆ノート五十冊と大量の考察メモ、レポート類等（以下、ノート類と略記）の研究資料化に着手している。ノート類には新版『西田幾多郎全集』にも未収録の講義ノート、研究ノート、読書ノート、メモ等と推測されるものが含まれており、その研究資料化は今後の日本哲学史研究に一石を投じる可能性がある。

ただし、ノート類は水損、カビ、虫食い、インクの流出等、汚損が激しく、修復が必要である。修復目的は①収集史料のさらなる劣化を防ぐこと、②展示・教育・研究資料としてふさわしい状態を回復することである。ふさわしい状態とは文字情報を読み取れる状態ということであるが、現代の修復技術でも頁が固着し展開できないもの、インクが流れてしまった史料の文字情報の回復はかなり困難である。修復過程とその前後を画像データファイルとして保存できるのはIT技術のもたらしたメリットである。しかし、修復を終えた史料をそのまま画像データ化することによって博物館の博情報館の役割は完遂しない。

ノート四六冊の修復を終え、判読可能性の高いものから順次翻刻し、研究資料化に取り組んでいる。ノート類はおおよそ

A・講義ノート、B・研究ノート、C・読書ノートに分類することができる<sup>15)</sup>。使用言語はドイツ語、英語、日本語等であり、大半は横書きである。汚損やインク流れ等による消失、不鮮明な箇所があり、ノートであるから見え消し、書き込み、訂正、縦書き、略記、判読できない文字、誤記、脱字等が存在する。そうした画像データを直接アーカイブ化しても、研究資料にはなり得ない。教育資料、研究資料として文字情報にすべく、翻刻、編集方針を立て、人名や専門用語の解説、外国語の翻訳、引用文献・登場人物の解説、誤記の明示、消失部分の推測などを行い、研究資料化を図っている。情報公開の方法が全集の補遺刊行物であれ、電子ブックであれ、翻刻の目的は研究資料の提供にある。外国語文献が多数引用されているノートの翻刻は比較思想的考察そのものである。

翻刻では、京大文学研究科の林晋を中心に開発された「人文学におけるテキスト研究用のオープンソースソフトウェア SMART-GS (SMART-Geschichte Studie)」を用<sup>16)</sup>っている。

最初に翻刻を試行したのは、表紙に「Religion」と書かれた一冊である。これは一九一三年八月に京都帝国大学文科大学宗教学講座教授に就任した西田が同年九月から開始した「宗教学概論」のノートの一部と推測される。全集第十四巻に収録されている講義記録「宗教学」はこのノートに基づいた講義を聴講した久松真一の受講ノートを底本にしている<sup>17)</sup>。この経緯について久松は次のように記している。

幸いにも先生のかような自筆原稿があるのであるから、これをこの講義編号の底本とするのが最も至当ではあるが、筆者の筆記した講義と照合して見ると、無論同一のところが多く、又それより詳しいところも部分的にはあるのであるが、素描に終わって居るところも多く、かつ欠けて居るところもかなりあるのであって、全体からいって講義の筆記程に詳しくもなく整頓もされて居ないので、これを底本とすることは困難であるから筆者の筆記の方を採ることにした。<sup>(18)</sup>

「場所的論理と宗教的世界観」(一九四五年)を除くと西田が宗教を主題として論述した著述はない。全集収録の講義記録は宗教学概論として組織的な構成を取っており、かつ当時の西洋の宗教学、宗教心理学に対する比較思想的検討が見いだされ、西田宗教学の体系的理解とその思想形成の考察にとつて貴重な資料である。比して、今回翻刻に着手したのは久松というフイルターを通さない西田直筆のノートである。その翻刻は久松が書いているように全集収録の講義記録より貧弱ではあろうが、ノート裏面に書かれている参考文献など、全集にないものを含んでおり、西田哲学の理解をより豊かにする可能性を秘めている。

博物館のもたらす情報の多くは企画、編集、翻刻を経たものであっても、情報のリソースである収集史料に基づいている。博物館の機能が情報提供に重心移動していくとしても、哲学館

のレゾナードルを支えているのは保管資料の史料性である。資料研究の妥当性を担保するためには、可能な限り資料がもつ原史料性へとフィードバックできる通路を残しておく必要がある。以前、哲学館から三十キロほど離れたところにあった「魚のいない水族館」(魚たちをデジタル画像で鑑賞する水族館)は開館時には十万人もの来館者を集めたが、二〇〇八年春、開館十年足らずで閉館した。それを「博物館はモノ資料の単なるデジタル情報の館であってはならない」という警鐘だと受け止めている。

\* 本稿で「現在」というのは、二〇一七年六月現在を意味する。

- (1) 博物館法第一章総則、(定義) 第二条第一項。  
<http://www.houko.com/00/01/S26/285/HTML> (2017.6.10.アクセス)
- (2) 博物館という呼称は、建築家・黒川紀章が梅棹忠夫との対談で使ったのが最初であった(梅棹忠夫編『民博誕生 館長対談』中公新書、一九七七年、一五二頁)。それ以降、梅棹はたびたび博物館という呼称を使った(梅棹忠夫『情報の文明学』中公新書、一九八八年など参照)。
- (3) 平成二九年度の比較思想学会のパネル発表が行われたのは二〇一七年六月十八日であり、本文中の「現在」という表記はこの日付を意味する。
- (4) 本稿では、史料は基本的には収集史料の意であり、資料は修復された所蔵品も含めた保管資料の意で使用する。
- (5) 契約書は平成十一年十月に西田幾多郎の外孫にあたる上田薫氏(元都留文化大学長)より、旧宇ノ気町立西田記念館に寄贈され、現在哲学館が所蔵する。

(6) 浅見洋『善の研究』とその読み方』西田幾多郎——生命と宗教

に深まりゆく思索』春風社、二〇〇九年、九一—一〇一頁の第II部第一章。

(7) (1975) は新版『西田幾多郎全集』(岩波書店)の第十九巻、七五頁からの引用を示す。以下、同様。

(8) 高橋里美『意識現象の事実とその意味——西田氏著『善の研究』を読む——』(上、下)『哲学雑誌』一九二二年五、六月号。

(9) 倉田百三『生命の認識的努力』『愛と認識との出発 青春の息の痕』春秋社、一九六三年、一一—一二頁。

(10) 加藤尚武『西田幾多郎』『言論は日本を動かす』第二巻、講談社、一九八六年、七三頁。

(11) 鈴木真美『生命で読む日本近代』日本放送協会、一九九六年、二八頁以下参照。

(12) 野家啓一『歴史的生命の論理——西田幾多郎の生命論——』『講座「生命」96、生命の思索』哲学書房、一九九六年、一三頁参照。

(13) 『未完の女性哲学者 高橋ふみ』(石川県七塚町、一九九七年)『未完の女性哲学者 高橋ふみ資料集』(石川県七塚町・宇ノ気町教育委員会、一九九七年)等。

(14) 『西田幾多郎全集』第十四巻の後半部には講義ノートIとして『英倫哲学史』『心理学講義』『倫理学草案』『宗教論』、第十五巻には講義ノートIIとして『哲学概論』[Vorlesung 1929]、講義 1929]、

第十六巻には『純粹経験に関する断章』『研究ノート』が収録されている。

(15) 全集ではBを「断章」、Cを「研究ノート」と呼んでいる。『西田幾多郎全集』第十五巻、iii頁の「凡例」参照。

(16) <http://smart-gs.osdn.jp/manual/ja/info.html>参照。林らはこのソフトを使い、『京都哲学マーカー』(<http://www.kyoto-gakuhin.info/>)を構築している。

(17) 『宗教学』『西田幾多郎全集』第十四巻、三一—五二頁。

(18) 久松真一『宗教学』旧版『西田幾多郎全集』第十五巻(岩波書店)、

一九六六(昭和四一)年の「後記」、三九五—三九六頁。

(あさみ・ひろし、日本哲学・医療倫理、石川県西田幾多郎記念哲学館館長)